

日本文化の再創造と継承

—サンパウロの日系コミュニティを中心とした文化イベントの諸相—

紀 葉 子
長 尾 直 洋

本稿は、現代のブラジル各地で見られる日本文化の諸形態について、そのブラジルにおける表象、消費、継承、そしてブラジルの主流文化との混淆の可能性について論じるものである。はじめに、ブラジルの日系社会の中心とされるサンパウロ市リベルダーデ地区における四つの「伝統的」祭りを概観する。その中で、ブラジル国内に最も流布している七夕祭りに焦点を当て、その成立過程、および近年におけるブラジルのフェスタジュニーナとの共催による混淆の可能性を論じる。また、ブラジルの若年世代による日本文化の消費と継承の事例として、アニメやマンガイベント、また沖縄系による芸能を見る。非日系を含むブラジルの若年層は、アニメやマンガを通して日本語、日本文化へ関心を寄せ、また沖縄系の若者たちは琉球芸能を通して自身のルーツを身体に刻み込んでいく。本稿を通して、ブラジルにおける日本文化の再創造と継承の一端が明らかとなるであろう。

keywords : 日系コミュニティ、日本文化、ブラジル文化、文化継承、創られた伝統

目 次

はじめに
現代のブラジルにおける「伝統的」日本文化の表象と消費
七夕祭りとフェスタジュニーナとの邂逅
日系コミュニティにおける新しい文化の波
飛翔する身体と跳躍する身体
むすびにかえて

はじめに

1908年の笠戸丸移民から数えて105年の日系移民の歴史を持つブラジルでは、日系社会による様々な活動、またテレビやインターネットなどのメディアを通して、種々の日本文化が紹介され、日系・非日系を問わず多くの人々に消費されている。

本稿は、現代のブラジル各地で見られる日本文化の諸形態について、そのブラジルにおける表象、消費、継承、そしてブラジルの主流文化との混淆¹の可能性について論じるものである。

現代のブラジルにおける「伝統的」日本文化の表象と消費

IBGE (Instituto Brasileiro de Geografia e

Estatística)²の人口増加率の指標に基づいて、サンパウロ人文科学研究所によって160万人と推定されている日系人口を擁するブラジルの各地では、日系諸団体の開催する様々なイベントによって日本文化が表象され、消費されている。その中でも、ブラジルの日系社会の中心とされるサンパウロ市内の「東洋街」リベルダーデ地区には、花祭り、七夕祭り、東洋祭り、餅つき大会という、伝統的な日本文化をもとにした四つの代表的なイベントが存在している。以下では、根川幸男(2009、203-209頁)による紹介に基づいて、これらのイベントについて概観する。

花祭りは、釈迦生誕を祝う行事であり、日系各宗派の寺院で行われ始めた。1958年の移民50周年祭と関連してブラジル仏教連合会が結成されると、その合同開催となり、さらに1976年以降はリベルダーデ商工会の招致によって、リベルダーデ広場を中心に開催されている。釈迦の誕生日とされる4月8日に近い週の月曜から土曜日に、リベルダーデ広場にて甘茶供養が行われ、最終日の土曜日には各宗派による法要、お練供養などが行われる。

七夕祭りは宮城県の都市祝祭がブラジルへ導入されたものであり、1979年の初開催以降、ブラジ

ル宮城県人会とリベルダーデ商工会による協力体制の下で実施されてきた³。7月7日に近い週末に開催され、リベルダーデ広場、ガルボンブエノ通りなどが七夕飾りによって装飾される。多くの露店が並び、また日系神官による七夕神事、郷土芸能などが行われている。

東洋祭りは、リベルダーデ地区の日系商店街活性化のために、1969年に始められた祝祭で、当時の中国・韓国系の進出を反映して「東洋祭り」と名付けられた。リベルダーデ商工会の主催、サンパウロ市の協賛で、毎年12月初旬の週末に実施される。リベルダーデ広場とガルボンブエノ通りを中心に、多くの露店が並び、日本各地の郷土芸能が披露される。

餅つき大会は、1976年のNHK番組「ゆく年くる年」における東洋街からの生中継をきっかけに始まった。リベルダーデ商工会の主催、サンパウロ市の協賛で、毎年12月31日の午前中にリベルダーデ広場にて開催される。法被を纏ったリベルダーデ商工会の関係者らによって、杵と臼を用いた餅つきが行われ、紅白餅が来場者へと配られる。また、同会場では南米神官による茅の輪くぐりの神事も行われる。

根川は、上述した四つのイベントを従来のゲスト側の伝統とホスト側の視点が交わることで新たな伝統・日本文化が表象された「新伝統行事」と命名している（前掲書、217-218頁）。元々ゲスト側に向かって組織されたこれらの「伝統的」イベントは、サンパウロ市の多文化主義的な観光・文化戦略の後押しを得たことで（前掲書、213-214頁）、現在は日系・非日系双方に消費される大きな文化資源となっている。

上述の四つの「伝統的」イベントの中でも七夕祭りは、ブラジル宮城県人会の普及への積極的な姿勢もあり、ブラジル全土への広がりを見せている。ブラジルにおける「伝統的」日本文化の表象と消費について大きな役割を果たしていると考えられる。七夕祭りについて、さらに詳しくみてゆこう。

ブラジルの七夕祭りは、1979年、ブラジル宮城県人会の創立25周年記念行事として、リベルダーデにて初開催された。その導入元である宮城県仙

台七夕まつり⁴の公式ホームページによれば、七夕まつりは手習・手芸の上達と田の神への豊作祈願を目的としたものとされている。また、同まつりの特徴として笹飾りの存在が挙げられており、短冊は学問や書道の上達、投網は豊漁と豊作と、それぞれの飾りの持つ意味合いについて簡潔な説明がなされている（仙台七夕まつり協賛会、2013）。

このまつりをモデルとして開催されたブラジルの七夕祭りの構成要素としては、七夕飾りと踊り、織姫と彦星の物語、ブラジル宮城県人会が主催となった1985年の第7回以降の短冊販売（ブラジル宮城県人会記念誌編集委員会、1999、47頁）、また1997年の第19回七夕祭りからの、日系神官による七夕成功祈願祭、本祭での祝詞奏上、そして短冊供養祭などの神事が挙げられる（根川、2008、76頁）。その他に、地方民俗芸能や武術演武、ヨサコイソーランなども上演されている。

第1回サンパウロ七夕祭りは郷土の「伝統文化」の導入・保存・継承という方向性が明確に打ち出されたものであった（前掲書、73頁）。しかしながら、ポルトガル語の招待状や広告の作成など、早くから非日系への祭りの普及が目指されており（ブラジル宮城県人会記念誌編集委員会、1999、63頁）、祭りの構成要素についても、「ブラジル人が好み、理解しやすく、受け入れ易い、新しい解釈、方法」（前掲書、72頁）が考案され加わっている。その最たるものとして、短冊の販売とその色による意味づけの創造が挙げられる。先に触れたように、元々の仙台七夕まつりにおいて短冊は学問や書道の上達という意味合いを持つものであった。しかしながら、現在リベルダーデで行われている七夕祭りをみると、販売されている六色の短冊はそれぞれ、白は平和（Paz）、緑は希望（Esperança）、黄は金運（Dinheiro）、ピンクは愛（Amor）、青は天の加護（Proteção dos Céus）、赤は情熱（Paixão）との意味づけがなされており、各色の持つ意味に沿った願い事が短冊に書かれ、笹竹に吊るされている。実際、短冊の購入者の80%は非日系のブラジル人であるとされており（前掲書、63頁）、こうした改変によって、七夕祭りは非日系の人々にも消費し易い「伝統的」



図1 リベルダーデにおける七夕祭り⁵

日本文化を表象するものになったといえる。

七夕祭り、および仙台の吹流し式七夕飾りを導入したイベントは、ブラジル宮城県人会による普及、また日本にて仙台七夕まつりを経験した留学生による導入など、様々な経緯を経てブラジル全土に広がっている（前掲書、30-31頁；根川、2008、77-80頁）。こうした中で、近年、「伝統的」な七夕祭りとは異なる、新たな七夕祭りの形態が現れ始めている。それは、七夕祭りと、ブラジルの伝統的な祝祭の一つであるフェスタジュニーナとを結びつけたものであり、これまでにいくつかの開催例が確認されている。次節では、その中でも、サンパウロ市の公式行事となった唯一の事例であるイタケーラの七夕祭りについて見てゆくことで、「伝統的」日本文化とブラジル文化との混雑の可能性について考察してゆきたい。

七夕祭りとフェスタジュニーナとの邂逅

ブラジルにおける七夕祭りとフェスタジュニーナの結びつきについて見てゆく前に、まずはフェスタジュニーナの概要を確認しておく。

フェスタジュニーナは、聖ジョアン（6月24日）を中心に、聖アントニオ（6月13日）、聖ペドロ（6月29日）といった6月の諸聖人の日を併せて祝うカトリックの祝祭である。その起源は、キリスト教以前の北半球における、夏至を祝う豊穡祈願の儀礼であるとされる（RANGEL 2008：pp.15-16）。南半球に位置するブラジルでは、初

冬の、新たな収穫のための作付けの時期に行う祝祭として重視された（Ibid., p.21）。祭りの際には、悪霊を追い払うための焚火、聖人を目覚めさせるための花火、聖人への願いが託されたカラフルな気球、火を通したトウモロコシなどの食物、さとうきびから作る蒸留酒のピング、生姜の根をピングに加えたケントンと呼ばれる甘酒などが代表的な要素としてみられる。また、田舎風の衣装を身に纏った男女による結婚式の寸劇、彼らがベアとなって踊るクアドリーリャ、ブラジルのカントリーマージックであるセルタネージョなどの音楽、そして丸太上りや魚釣りゲームなどが楽しめる。会場には竿が立てられ、これを支柱に祭りの間の聖人の存在を示す色とりどりの紙で作られた旗が掲げられる。この竿は、植物の肥沃化を象徴し、特にトウモロコシの収穫と関連している（Ibid, p.73）。

ブラジルのフェスタジュニーナを構成する諸要素は、ブラジルの内外から多様な影響を受けたものといえる。祝祭の起源は、キリスト教以前の



図2 移民画家半田知雄の「聖ヨハネ祭り」⁶



図3 クアドリーリャを踊る参加者たち⁷

豊穡儀礼であり、ポルトガルによってブラジルに持ち込まれた後は先住民やアフリカ系ブラジル人の慣習として取り込まれた (COSTA 2012 : p.16)。クアドリーリャはフランス由来のものであり (RANGEL 2008 : p.51)、食べ物については先住民文化の影響を色濃く受けている (COSTA 2012 : pp.23-25)。さらに、現在のブラジルにおけるフェスタジュニーナは地方色に富んでおり、北東部をはじめとして、各地方で異なった踊りや衣装、飲食物を見ることができる (RANGEL 2008 : p.24)。

以上を踏まえたとうえで、イタケーラにおける七夕祭りとはフェスタジュニーナの結びつきについて検討していく。

“1° Arraial das Estrelas de Itaquera (第1回イタケーラ七夕祭り)”は、サンパウロ市とイタケーラ区の主催、そしてブラジル宮城県人会などの運営によって、2012年の6月23日と24日に、サンパウロ市東部のイタケーラ区において開催された。祭りの副題は二つあり、一つは2014年のサッカーワールドカップ用の会場が同地区にて建設中であることにちなみ、“Rumo à Copa de 2014 (2014年ワールドカップに向けて)”とされている。もう一つの副題は“FESTIVAL TANABATA & FESTA JUNINA (七夕祭りとはフェスタジュニーナ)”である。本祭を宣伝するポスターの上部には短冊、中央部の左側には七夕飾りと笹竹に吊るされた短冊が配置され、また中央部の右側にはフェ

スタジュニーナを象徴する色とりどりの旗と焚き火が描かれており、本祭が上述の二つの祭りを結びつけようとするものであることがわかる。

当時のイタケーラ区長パウロ・セーザル・マシモ氏によれば、本祭を開催した目的は「フェスタジュニーナと日本の七夕祭りという文化を通して、コミュニティ内の相互交流を支援し、ブラジルにおける平和の文化を宣伝する」ことにあるという (Organização 1° Arraial das Estrelas de Itaquera 2012 : p.2)。また、運営団体の一つであるブラジル宮城県人会の中沢宏一会長は、自身がブラジルに移民として渡った後に参加した最初のフェスタジュニーナにおいて、飾り付けや竹によるアーチ、旗や吊るされた気球を見てすぐに故郷の七夕まつりを思い出したと二つの祭りを結びつけた着想のきっかけについて語っている (Ibid, p.3)。同地区には、フェスタジュニーナが盛んに行われているブラジル北東部から仕事を求めてサンパウロへやって来た人々が多く住んでおり、また日系人も多数住んでいることから、同祭が受け入れられる素地は整っていたといえる。

祭りのプログラムは、ラジオ体操、三味線、空手の演舞、盆踊り、琉球太鼓などの日本側の演し物と、クアドリーリャなどの踊り、セルタネージョ、サンバなどの音楽といったブラジル側の演し物によって構成されている。全体的な傾向として、日本側の演目数の方が多いが、夕方以降はブラジル側の音楽によって占められているなど、日本側の演し物とブラジル側の演し物がそれぞれある程度連続して披露されていた。

祭りにおける飲食物について、同祭のパンフレットには写真付きで、フェスタジュニーナの典型的な食べ物、そしてテンプラ、ギョーザ、ヤキソバといった日本食が紹介されている (Ibid, p.13)。会場では、これらの他に、チョコレートでコーティングされたイチゴの串などのブラジルの食べ物、また寿司や串焼きといった日系の出店による日本食が数多く提供されていた。

祭りの出店については、先述した食品関連のもの以外に、ブラジル宮城県人会による短冊等の販売、サッカー関連のグッズ販売、地区の民芸品販売などがあり、また会場の一角にはトランポリン



図4 神棚と七夕飾り⁸

など、子ども用の遊具が設置されていた。

祭りの装飾については、会場の中心に位置する広場に短冊と七夕飾りが供えられた神棚が配置され、広場の周囲には短冊を吊るすための細身の笹竹が立てられていた。また、神棚の真上を含めた、会場の様々な場所にはフェスタジュニーナ特有の色とりどりの旗が飾られていた。さらに、それぞれの出店のテントには七夕飾り、旗、そしてフェスタジュニーナにて行われる遊びの一つである魚釣りのイラストなどが掲げられており、双方の祭りの諸要素が至る所で見られた。

以上のように同祭には、踊りや音楽、また飲食物や装飾など、双方の特徴的な諸要素が確かに盛り込まれていた。しかしながら、それらの諸要素は混ざり合っているわけではなく、あくまで並立しており、双方の祭りが結びついたとは言い難い。ただし、ブラジルの伝統的祝祭であるフェスタジュニーナと並立して開催されたことで、「伝統的」日本文化としての七夕祭りがよりブラジルの人々にとって消費し易いものになったことは疑いないであろう。

現状では、同祭をして七夕祭りおよびフェスタジュニーナの混淆と単純に結論づけることはできない。しかしながら、先述の中沢氏の語りにもあるように、双方の祭りには豊穰祈願、色とりどりの飾り付け、願いを込めたカラフルな気球と短冊、男女が結びつく物語など、多くの類似点が見られる。また、先に指摘したように、今日のブラジル

におけるフェスタジュニーナは国内外の様々な文化の混淆によるものであり、ブラジルにおける七夕祭りも、その普及に際していくつかの要素の意図的な改変を経験している。双方の類似性、およびそれぞれの祭りの現在に至るまでの形成過程を勘案すれば、今回のイタケーラ七夕祭りのような試みが続くことによって、双方の類似点を中心とした祭りの諸要素の混淆が起こることは十分に想定できる⁹。

二日間でおよそ1万人¹⁰が来場した同祭は、先述したリベルダーデにおける四つの祭りと同様、ブラジルにおいて日系、非日系双方に訴求する新たな文化資源の一つとして、またブラジル文化と「伝統的」日本文化の双方をより豊かなものとするであろう混淆の可能性を秘めたイベントとして、その存続と発展が期待される¹¹。

(文責：長尾直洋)

日系コミュニティにおける新しい文化の波

伝統的な日本の生活文化としての七夕祭りが、ブラジルの伝統的な文化との邂逅を経て文化継承の新たな局面を拓きつつある一方で、新しい日本の文化も日系コミュニティを越えて広がりながら日本文化の継承の新たな可能性を呈示しつつある。

参加者も主催者も高齢化の傾向を有する伝統的な祭りと異なり、若年齢層によって主催され非日系のブラジル人の参加も促す新しいイベントとしてアニメやマンガを題材としたものが増えている。南米最大のイベント、「アニメフレンズ(Anime Friends)」はサンパウロで2003年から開催され、今年で10年を迎え、日本製のアニメーションや特撮作品が地上波テレビで放映されなくなった今日においても若い世代の参加者を増やしている。また、こうした集まりはサンパウロの中心部だけでなく、近郊都市をはじめ地方都市でも開催されている。Anime Friendsの前後にはサンパウロ州エンブー・ダス・アルテス市で第6回日本祭りの一環として「アニマ・エンブー(Anima Embu)」が同市内の民間施設「オ・カイピロン」で開催されているし、サンパウロ州ブラガンサ・パウリスタ市では日本人会の中の青年会が主体となって第

4回目の「アニメ・ニッポ (Anime Nippo)」が、日本人会による日本祭りとは別日程で開催されている。サンパウロ州内とはいえ公共交通網が整備されていないブラジルにおいて、特に自動車免許をもたない若年層が中央で開催されるイベントに参加することは容易ではない。地域密着型のイベントの開催は新しい日本文化を愛好する人々の裾野をさらに広げることにつながっているといえよう。

ブラガンサ・パウリスタ市 (以下、ブラガンサと略す) は人口14万人弱のフェルノンジアス高原の中心部に位置し、冷涼な気候であることからバタタ (ジャガイモ) の生産の適地として知られている。戦前からの移住者に加え戦後にはコチア生産者産業組合の青年たちも配耕され「バタタ王国」として一時代を築き、1963年にはバタタ祭を盛大に催している。が、バタタは連作ができないこと、相場に投機的な性格が強いことから、「名前をあげればきりが無い無いほど多くのバタテイロ¹²が一攫千金の夢を掴んだ。だが、このうち何人が掴んだ夢を大きく膨らまし、長く持続する事に成功したであろうか、大抵の人は長い時の経過と共に富も野望も泡沫の如く消え失せ、新たな局面を切り開き次の目標に向かって挑戦を繰り返してきた。そうして今に命をつなぐ人々は淡々として静かな余生を送っていることであろう。古今東西、それがこの世の常であり、浮き沈みに心を囚われては一度しかない人生、練言¹³でファイにしてはもったいない。みんな兵どもが夢の跡なのである」(野口浩、2006、81頁)。バタタ生産の最盛期には近郊に入植する新たな日本人家族のために寄宿舎を建設し、継承言語としての日本語教育に力を入れていた。その成果は有為な人材の育成として花開き、1997年には日系人が市の三権の長を独占するほど、農業者としてではなくホワイトカラーとして活躍する二世・三世の姿に結実する。「日本移民は時代を問わず何処に移住しても押し並べて子どもに教育をつけたいのである。よほど劣悪な条件下におかれぬ限り、1日1回の飯を減らしてでも親は子を学校へや」(前掲書、49頁) りたいものだから、連合日本人会が結成される前に「当地の日本人が最初に作った自慢の建造物」

(前掲書、91頁) として奨学舎 (日本語の寄宿学校) を建設したのは1954年のことだった。ヨーロッパからの移民は最初に教会を建て日本からの移民は最初に学校を建てるとのコロニアの人口に膾炙するエピソードはブラガンサとて例外ではない。この日本語学校も「70年代後半から80年代初頭にかけて時代をピークにあとは穏やかな下降線をたどって行った。明らかにブラガンサは衰退期に入り」(前掲書、91頁) り、2002年には売却の憂き目をみている。だが、奨学舎の売却は必ずしも日本語教育そのものの衰退を意味している訳ではない。日本語教師の植西晶子氏はブラガンサ連合日本人会の結成50年を記念して行われた「学術都市へ脱皮するブラガンサ」と題された座談会で次のように語っている。「当地の日本語学校では10年になります、サンパウロでも教えていて感じましたことは日本語学校が目に見えて減っています。生徒が集まらなくなったからです。それに比べてブラガンサでは反対に増えています。しかも非日系人が著しく増加しているという特徴があります。彼等は日本語を習うことで日本の文化に接したい、理解を深めたいと考えています。それだけ日本文化に対する関心の度合いが強まっているのですが、このことが無関心派の日系人の関心と呼び覚ます働きを持ったのです」(前掲書、204頁)。こうした植西先生の旧来の継承言語としての日本語教育から一歩踏み出そうとする試みがAnime Nippoの成功にもつながっている。Anime Nippoを運営する青年たちは日本人会内の青年会に属しているが、彼らの中には「日本人」でも「日系人」でもない、いわゆる非日系のブラジル人も含まれている¹³。こうしたマンガやアニメを通して日本文化に触れたいと願う青年たちの受け皿としてバタタ王国の遺産が活かされているのである¹⁴。

日本人会の建物に設置された入場門に描かれた初音ミクと思しきキャラクターは早朝から列を作って開場を待っていた若者たちを優しく招く。思い思いの扮装で会場を練り歩くコスプレに興じている若者が求めに応じてファイナダー越しにポーズを決めるのはブラジルのみならずフランスや祖国・日本で開催されているマンガ・アニメ



図5 開催告知ポスター

系イベントと全く同様である。コスチュームを身にまとして登場人物になりきるだけではなく、自らマンガ作品を描こうと試み、同人誌を作る若者もおり近郊の小都市とはいえ、イベントの内容は中央で開かれる大型のものに比して全く遜色はない。アニメや特撮の主題歌を歌うバンドも招待され実に賑やかである。日本の文化としてマンガやアニメが取り上げられるのはそのようなモノが一般的になる以前にブラジルに渡った人々から見るといささか奇異であるかもしれない。そうでなくても、日本の文化としては「恥ずかしい」¹⁵部類のものだとみなしているひとは今日の日本国内においても少なくないだろう。しかしながら、かつては優れた工業製品がもの言わずして日本文化の先進性を示していたのに対し、その座を新興国に譲り渡しつつある今日において、アニメやマンガはそれらに代わり「日本」を象徴するCoolnessとして若年層を中心に世界的に受け入れられているのである。

飛翔する身体と跳躍する身体

2013年に開催されたフランスのJapan Expoにおける質問紙を用いた調査でも～非実在である彼女には国籍は無いのだが～知っている日本人の名前として急速にその認知度を上げている初音ミクはリーマンショック以降、就業の機会を奪われて引き延ばされた思春期を生きることを強要されている若者たちのアイドルである。生身の肉体を有していないからこそ、彼女は受容している人々に

如何様にも解釈し直される余地を残している。具体性をもたない身体は抽象化の度合いが高ければ高いほど、見ているものそれぞれのフレームワークの中でそれぞれの表象を結ぶ。ドメスティックな日本文化が世界中で受け入れられるひとつの所以でもある。

欧州最大のマンガ・アニメの祭典を催すフランスと南米最大の同様の祭典を催すブラジルの共通点はカトリックの文化が日常生活に浸透していることであり、両者に共通する人気作品が『聖闘士星矢』である¹⁶ことは興味深い。信仰生活と結びつかないからこそ自由な発想で再構築されたキャラクターたちは日本社会を飛び越えて今なお世界中に多くのともだちをもっている。聖堂の薄暗がりには佇む「聖人」をきらびやかな聖衣を纏った若き戦士たちにリメイクした車田正美氏の斬新な発想¹⁷とともに、アニメ化に際してキャラクターデザインと作画監督を務めた故荒木伸吾氏と姫野美智氏のシンプルかつ端正な筆致¹⁸が不動の人気の源泉であろう。荒木氏とその弟子である姫野氏の描くキャラクターはアメコミに描かれる筋骨隆々としたヒーローとは異なり少女と見紛うような飛翔する少年ヘルメスである。初期にこそ青銅聖衣を納めた聖衣箱を重そうに背負い生身の肉体を惹起させるエピソードがあるものの、宇宙空間に舞台を移すと重力からいっそう解放される。こうした飛翔する身体は日本のマンガやアニメに描かれる登場人物たちの特徴のひとつでもあり、想像の翼を広げ「現実」からしばらくの間、異世界に旅することは誰からも責められることではないだろう。自らの肌の色、髪の色、性、そして容貌やスタイルは重い足枷となって社会生活における自らのキャラクターを否応無く規定する。社会的文脈に編み込まれた身体性からの暫しの解放が作品世界への耽溺によって果たされる。それは現代社会において、なんとかなしの生きづらさをかみしめる思春期のただなかにあるものにとってはある種の救いですらあるだろう。絶えず揺れ続ける自己のアイデンティティや望まぬ形で押し付けられ逃れることが適わない社会的役割からイメージネールの世界で解放されることは、現実生きる力として回帰する。

だが、こうした身体は歴史をもたない。社会的文脈からの離脱を企図する身体を日常に持ち込むことは日常の生活世界そのものを危機に陥れる可能性を有している¹⁹。それが故にこそ、あるいは〈大人〉は飛翔する身体を描くマンガやアニメを、そしてその世界をなぞる〈こども〉を嫌悪するのかもしれない。しかしながら、地に足をつけようとしないう〈こども〉に苛立ち、現実に戻そうとする〈大人〉が心配するほど〈こども〉は愚かではなく、多くの場合、現実に戻る回路を失ったりすることはまず、ない。しかしながら、羽根のついたサンダルを持たないヘルメスは大地を強く蹴らなければ高く飛び立つことができないのもまた確かなことである。

日系コミュニティでは創られた伝統文化としての性格が色濃いヨサコイソーランや和太鼓といった芸能が若い世代に受容・継承されつつある。その中でも際立った存在感を示しているのが沖縄の芸能を演じる若者たちである。彼らは多くの三世、四世がそうであるように日本語をほとんど話すことはできないし、うちなーぐちで話すことも難しい。だが、歌うことはできる。そして、歌い舞うことで時空を超えて琉球の龍を呼び寄せる。玉城流小太郎会の大嶺初枝師範が主宰するレキオス芸能同好会のメンバーたちが大地を蹴ってエイサー太鼓を抱えて高く跳び上るとき、地球の反対側の琉球弧とサンパウロは空間を越えてひとつになる。琉球國祭り太鼓ブラジル支部の若き演者たちがHYの「時をこえ」にあわせて歌い舞いながらおばあとおじの歴史に寄り添うとき、歴史をなぞる身体が高く大きく躍動する。若い人でも親しみやすい打楽器を用いる「新しい伝統芸能」のみならず、御冠船踊りをその祖とする古典的な琉舞もまた、若き舞踊家が有望な担い手として活躍している。玉城流てだの会の具志堅シゲ子師範を指導し、自らが振付けた「イラヨイ月夜浜」を踊る玉城流扇寿会の齊藤悟師範の高く差し延べられた掌たなこころには青く白く燃える八重山の浜の花がぼつと咲く。古典舞踊の研鑽を経て体得した豊かな表現力は観るものを時空を超えて八重山諸島の浜辺へとつれてゆく。自らの身体に琉球の風土や沖縄の歴史を宿しそれを観客に披露することで共有

を促す舞踊は芸能の最もプリミティブな姿でもある。もちろん、彼らが演じるのもまた非日常であるが、その非日常は日常から遊離したものではなく、日常と地続きのそれである。非実在性の故に通文化的な力を有するマンガやアニメの身体性とは対称的な地に足のついた文化の姿がそこにはある。歴史を欠いた身体は歴史から学ぶことをしない身体であり²⁰、歴史の忘却は時として歴史そのものの再創造²¹につながりかねない。アニメやマンガに表象される飛翔する身体の危うさはこの点にこそある。

むすびにかえて

アニメやマンガが文化としての危うさを内包しているにせよ、それは決して否定されるべきものではないことは繰り返し言うまでもない。国際交流基金に招聘されて来伯したペガサス星矢を演じる古谷徹氏は「ブラジルのファンに対して『アニメや漫画を通じて日本文化を知り、もっと日本を好きになってほしい』と」²²呼びかけたという。自国の特徴的な文化を好きになってもらう以上に確かな安全保障があるだろうか。アニメやマンガをカネになるかどうかで判断するのではなく、フランスを中心に第9芸術としての評価が高まりつつある今日、その文化的意味を問い直す作業は急務であろう。軍事力や経済力による国際的なプレゼンスよりも文化力によってそれを高めることこそ、今日の日本社会に求められていることなのではないか。そして、その目指すべき先には床の間に刀ではなく三線を飾ってきた琉球の文化²³があるととしても、あるいは、過言ではないだろう。

(文責・紀 葉子)

引用文献

- ブラジル宮城県人会記念誌編纂委員会『ブラジルにおける
仙台七十年のあゆみ』ブラジル宮城県人会、1999
年
COSTA, Cleonildes Aquino da : *Festa junina : síntese de
uma mistura cultural*, Sena Madureira, 2012
Goffman, E. : *Frame Analysis*, Harper&Row, 1974
半田知雄 『画文集 ブラジル移民の生活』無明舎出版、
1986年
Hobsbawm, E., Ranger, T. : *The Invention of Tradition*,

Cambridge University Press, 1983, 『創られた伝統』、前川啓治、梶原彰昭訳、紀伊国屋書店、1992

根川幸男「ブラジルにおけるエスニック日系新伝統行事の創出—七夕祭りの再創と展開を中心に」『移民研究年報』日本移民学会、第14号、2008年、71-82頁

——「多文化都市サンパウロにおける「日本文化」表象の形成—東洋街における新伝統行事を中心に」住田育法監修『ブラジルの都市問題—貧困と格差を越えて』、春風社、2009年、194-221頁

Neo Tokyo, No.89, Escala, 2013

野口浩『ブラガンサ・パウリスタ連合日本人会50年史 光と影の記憶 1955-2005』ブラガンサ・パウリスタ連合日本人会、2006年

大道勇『琉舞手帖』ポーターインク、2010年

Organização 1º Arraial das Estrelas de Itaquera : *Relatório de Atividades do Primeiro Arraial das Estrelas de Itaquera*, São Paulo, 2012

RANGEL, Lúcia Helena Vitalli : *Festas juninas, festas de São João : origens, tradições e história*, São Paulo, Publishing Solutions, 2008

サンパウロ人文科学研究所ウェブサイト
(<http://www.cenb.org.br>、2013年9月19日抽出)

仙台七夕まつり協賛会ウェブサイト
(<http://www.sendaitanabata.com/>、2013年9月19日抽出)

注

- ¹ 本稿における「混淆」という用語は、1980年代以降のポストモダン人類学における、構築主義的な「異種混淆性」への肯定的な評価を踏まえたものである。
- ² ブラジル地理統計院
- ³ これまで「ブラジル宮城仙台七夕祭り」という名称で開催されてきたが、本年度（2013年）については、両団体の確執から、リベルダーデ商工会の単独開催となっている。
- ⁴ 宮城県の仙台七夕まつり協賛会は七夕祭りの表記を「七夕まつり」としているの、ここでは祭りをひらがなで表記する。
- ⁵ 2012年7月7日、筆者撮影
- ⁶ 半田、1986、88頁
- ⁷ 2012年6月23日、筆者撮影
- ⁸ 2012年6月23日、筆者撮影
- ⁹ 筆者がこれまでに確認している、他の七夕・フェスタジュニーナ複合イベントでは、着物や浴衣によるクアドリーヤ、フェスタジュニーナにおける短冊飾りなどが見られる。ただし、これらは全て日系団体によるものであり、非日系側からの動きでないことに留意する必要がある。
- ¹⁰ Diário Oficial da Cidade de São Paulo, 57 (120) , quinta-feira, 28 de junho de 2012
- ¹¹ 本年度（2013年）のイタケラ七夕祭りは、同区長の交

代の影響で、未開催のままである。この件について、運営側の一人であるブラジル宮城県人会の中沢会長は、同様の試みが七夕の普及にとって非常に有効なものであるとして、イタケラに限らず今後も開催のための活動を推進していくとしている。

- ¹² バタテイロはジャガイモ生産者を意味する。
- ¹³ 植西氏によると青年会のメンバーは35人程度で、昨年度までは非日系の方が多かったが今年になって新メンバーが入り、日系人の割合が70%程になったというのである。2010年に青年会が再開された頃には、非日系人の割合が過半数を超えていたという。
- ¹⁴ 欧州最大のマンガ受容国フランスにおけるマンガ・アニメイベントとブラジルにおけるそれとの大きな違いは、前者が現地のファンによって運営されているのに対し、後者は日系人組織との関わりを有していることである。日系コロニアは必ずしも良き理解者とはいえないが、イベントの運営等に関して会場の提供や日本とのパイプ役としての役割を担っていることが少なくない。
- ¹⁵ なぜ「恥ずかしい」文化という点については詳細な検討が必要である。東京埼玉連続幼女誘拐殺人事件の主犯とされた宮崎勤の犯罪動機を彼の趣味であるとされているマンガやアニメに結びつけて取り上げられたことによるオタクに対するバッシングなども大きな要因であろうが、そもそも死刑に処されてしまった今、本当の動機が何であったかを明らかにする術は永遠に失われてしまった。マンガやアニメが犯罪を誘発するものであるかの如き言説が有する意味については、東京都の「非実在青少年」をめぐる規制の問題とともに社会学的に分析する必要があることは言うまでもない。また、そもそも日本人が高級文化として外国人に誇りたいものよりも生活に根ざした「恥ずかしい」文化の方が、存外、大きな影響力を有しているのは浮世絵の例をひくまでもなく明らかである。
- ¹⁶ フランスのJapan Expoでは『聖闘士星矢』のジオラマが作成されていたり同人誌が作成されていたりと、関連作品を見なかった年はない。ブラジルでも国際交流基金が企画した「キャラクター大國ニッポン展」に関連してアニメで主人公のベガサス星矢を演じた古谷徹氏が同基金によって招聘されている（ニッケイ新聞、2013年9月14日）。イベントで熱唱される主題歌を聴かないことがない点でも両国は共通している。
- ¹⁷ 古今東西の神話や伝説、伝承を自由な発想でリメイクすることもまた日本のマンガやアニメが世界的に受け入れられる理由の一つであろう。ブラジルにおけるアニメとマンガの専門誌、“Neo Tokyo”最新号には古典的なヴァンパイアを日本が現代化した作品群を紹介したArthur Traferiの特集記事が掲載されている。丁寧に作品にあたってのもののその後の少女マンガに多大な影響を与えた萩尾望都の『ポーの一族』について全く言及されて

いないのは残念である。現在の人気作品から翻訳されてゆく傾向があるためマンガの古典的傑作が忘れられがちなのは世界第2位のマンガ出版国であるフランスでも同様である。

¹⁸ フランスでの人気は極めて高く2013年4月20・21日にニースで開催された第20回カルトニスト (Cartoonist) では、荒木伸吾氏の追悼イベントが行われた他、人気同人作家らによるオマージュのアンソロジー集も刊行されている。

¹⁹ 例えばコスプレ姿のまま公共交通機関を利用することを忌避するのはそのためであろう。だが、フランスではコスプレ姿のままRERで会場に向かう事は許容されている。日本社会では嫌悪される日常への進出にフランス社会が寛容である現象については稿を改めて論じる。

²⁰ もちろん、マンガやアニメからも歴史を学ぶことはでき

る。だが、今日、多く流通している作品群は日常から遊離した世界観が少なくなく、飛翔しているのではなく浮遊しているかのような危うさもまた拭い去れない。

²¹ 自らにとって都合が良いように歴史の解釈を変える傾向は日系コロニアにおいても第二次大戦後の勝ち組・負け組抗争をめくり繰り返し行われている。この抗争を乗り越えた契機もまた琉球弧からの移民にとっては歌と踊りにあった。これについては稿を改めて論じることとした。

²² ニッケイ新聞、2013年9月14日、7面

²³ 冊封使をもてなす踊奉行は士族によって担われており、三線を奏でる力は刀を振るうことと同様に高い教養と優れた精神性に裏打ちされたものであった。本土の芸能にまつわる仄晴さから琉球芸能が自由であるのはその風土によるものばかりではない。